

不登校経験を持つ若者たちの もう一つのキャリアパス

第1章 キャリアって何？



キャリア支援、キャリア形成、キャリア教育、キャリアプラン…。私たちの周りを見渡せば、実に多くの「キャリア」というコトバが使われていることがわかります。私たちの暮らしの中に多くの同じコトバが使われているとき、それは要注意なのかもしれません。気がつけばそれは、まるで意味を十分に理解しないままに使われる、記号のようなものになってしまっているのかもしれないからです。記号は、その意味を十分吟味することなしに、社会に流通していきます。これが消費社会を生み出す構造でもあるからです。

そして今回私たちは、この「キャリア」という当たり前のように使われてしまっているコトバを、あえて問い直してみようと思ったのです。

1. 交差する2つの移行期

「以前は、青少年の若者たちはみんなごく当たり前のよう大人になることができました。でも今は、そう簡単にはいかなくなりました。現代は、大人になることが難しい時代と言えるのかもしれませんが。特に困難を抱えた若者たちにとってはな

おさらのことです。だから彼らが学校から社会へと移行する過程に寄り添いながら、様々な道や様々な形を模索していく支援が必要なのです」

私はその日、ドイツ南部のニュルンベルグという人口50万ほどの街にいました。日本の文部科学省とドイツの家族・高齢者・婦人・青少年省（複合領域をカバーするために設定された総合省）が、昨年11月に合同で主催した青少年指導者研修に参加するためです。そしてこのメッセージは、その研修の責任者の一人であったニュルンベルグ市の移行マネジメント研修部長、メツガー博士が冒頭のあいさつで話されたものでした。

ドイツでは、青少年たちをいかにスムーズに社会へと移行させていくかということが、大切な社会的課題として扱われてきました。特にドイツでは、移民的背景を持つ人口が全体の約20%にのぼっており、そのことに起因する青少年問題が多様に存在するからです。彼らは、言語的、文化的、あるいは経済的な理由から学校の卒業資格を得にくい状況にあり、さらにそのことが職業資格を手に入れにくいという、さらなる

厳しい状況につながっていきます。また資格社会が定着しているドイツでは、職業資格を持たない労働者は非正規雇用者となり、大変厳しい労働条件のもとで働くことにもなりかねないため、このことが新たな貧困の連鎖にもつながっているのです。そしてこのような状況を放置することが、やがては自分たちの生活をも脅かすリスク社会へとつながっていくことを、彼らは過去のナチス時代の反省から学んだのです。そのため青少年の課題は、彼らだけの課題ではなく国民全体の課題として捉えられているのです。

メツガー博士の言う「移行」というコトバには、二つの意味が重ねられていました。その一つは、子どもから大人へ、あるいは学校から社会へという若者の発達過程における移行です。ドイツでは、幼少期における家族から学校への移行、そして青少年期における学校から社会への移行という時期が取り立てて重視されます。この不安定さを抱えた時期に、十分な社会的な支援が必要だと考えられているからです。そしてもう一つの移行、それは近代社会からポスト近代社会へという社会そのものの移行です。1980年代以降の社会の消費化と高度情報化のうねりは、便利さと引き換えに私たちの主体そのものを喪失させ、自分の意志に基づいた行動なのか、あるいは何らかの意志によってさせられている行動なのかの区別を不明瞭なものにしていきました。また多様な価値観が社会に流入してくるようになる一方で、人々の生活や行動がどんどん標準化されていくといったアンビバレントな状況を作り出し、その結果、地域社会の

解体や家族機能の喪失、個人の孤独感や連帯感の喪失などといった社会のつながりの断片化という状況を作り出していったのです。まさにそれは、ジークムント・バウマンのいう「リキッドモダニティ」（液状化する近代）そのものなのです。そしてドイツでは、ちょうどその時期に東西ドイツの統合、そして EU の成立と立て続けに大きな社会状況の変化があり、それが新たなパラダイムを形成することになっていったのです。

このように現代社会における青少年の課題は、個人の発達の、社会的な移行期と、社会そのものの近代からポスト近代への移行期とが交差するところで生じていきます。メツガー博士の言う大人になるということ、あるいは社会へと包摂 *social include* されていくことの困難さの背景には、このような個人の中に内在する変数と社会の中に内在する変数を双方に含んだ二つの大きな移行期の存在があるのです。そしてこのことは、ドイツだけが抱える状況ではなく、私たちの社会においても同じような構造的な課題がみられるのです。

私たち個人は、家族という小さな社会の中で育ちます。そしてその家族は、その外側にあるより大きな社会の影響を受けます。この時、善なる社会は、善なる家族を育み、善なる家族は、善なる個人を育むといった三層構造がうまく機能することが望ましい状況です。しかしポスト近代においては、社会そのものの危うさが露呈し始めます。危うさを含んだ社会が、家族の機能を喪失させ、機能を失った家族が新たな若者の問

題を作り出していくという構造が見られるようになっていくのです。

私たちは、個人という単位である若者の問題に、家族や社会の問題が集約されていることを意識しなければならないと思うのです。問題は、個人の中にあるのではなく、個人と社会との関係の中に生じていくのです。従って問題を抱えた若者たちが、ある一定の変容を遂げ、あるいはその変容が家族にも伝わり家族の機能を回復させたとしても、彼らが依然危うさを含んだ社会へとただ単純に包摂されていくだけではいけないと思うのです。彼らの変容が、社会的に何らかの意味を発信し、社会そのもののあり方に一石を投じるような仕掛けが必要になると思っています。それは何も大それたものである必要はありません。個人が社会から影響を受け続けているように、たとえ小さな規模であったとしても、社会が個人から少しばかりの影響を受け取るシステムが必要なのです。

私が今回この青少年指導者研修に参加するきっかけとなったのは、以前から日本のキャリア支援やキャリア教育のあり方そのものに疑問を持っていたからです。私の眼には、それらのアプローチそのものが受動的な「施し」のように映り、キャリア形成をおこなう若者たちの主体がどこか置き去りにされているように感じていました。また、支援そのものがその場しのぎ的で、どこか間に合わせ的な方法論に終始してしまっているような印象さえ受けていました。そうすると若者たちはせっかく変容を遂げたとしても、再び危うさを含んだ社会の中

に組み込まれた時には、簡単にはじかれてしまったり、不適應を起こしてしまったりする可能性がとても高いと考えていたのです。従って、この課題をどうクリアすればいいのかを真剣に検討できなければ、結局困難を抱えた若者の問題を本質的に問えないのではないかという思いがあったのです。

私たちはそんな疑問のもと、3年前から京都府の地域力再生プラットフォームの一環として「南丹ラウンドテーブル」を立ち上げ、若者支援に携わる援助者たちの学びの場を主催してきました。その中で「キャリアとは何か？」というテーマを立て、あらためてキャリアそのものの問い直しをおこなってきました。だから、今回のドイツ研修に参加しようと思ったのも、日本以外の社会では、この若者たちのキャリア形成の課題をどのように扱っているのか？という思いがあったからでした。

受け身ではない若者たちのキャリア形成。若者たちが自分自身の仕事の意味を今後も継続させていくことのできるキャリア形成。間に合わせ的なものではなく若者一人一人が自分自身とじっくり向き合い、自分自身を発見しながら進めていけるキャリア形成。そして若者の変容が社会に何らかの影響を及ぼしていけるような社会的機能を備えた支援のあり方を、私たちはどこかにイメージとしてあたためていたのかもしれませんが。そしてそのイメージは、私たちの中で長年の経験として培われてきた学習観と重なっていきました。すなわち主体的で能動的なキャリア形成というものは、本来自分自身の人生の物語を描くことと重なり、それは

新たな経験を絶えず自分の物語の文脈の上に編集しながら重ねていくという作業なのです。そして、これはまさに自律的な学びのカタチそのもののような気がするのです。ここに「学び」の世界「キャリア形成」の世界がかなり近い形で出会うことになります。特に若者たちの援助場面においては、これらを切り離しては考えられないのです。

ドイツの若者支援の領域では、教育 *pädagogik* と労働 *arbeit* はかなり密接なものとして捉えられています。ドイツでは伝統的に社会教育と職業教育がとても重視されてきたからです。社会の教育を受けた若者たちをどのような形で社会へと包摂していくのかは、社会の責任において大事なことなのです。私たちは、ドイツで何人かの当事者である若者たちに直接会って話を聞くことができました。その中でも特に印象深かったのは、内戦が続くチェェン共和国から難民としてドイツへとやってきた18歳の女の子でした。彼女はお父さんや他の兄弟たちを残したまま、お母さんと聾啞の弟と3人でドイツへと逃げ込んできました。イスラムの文化的背景を持つ彼女は、ヒジャブを顔に巻いていたことでいじめを受け、最初はなかなかドイツの学校になじめませんでした。しかし大変頭が良かった彼女はドイツ語の習得も早く、比較的スムーズに学校の卒業資格を手に入れることができたそうです。やがて彼女は小児科の看護師を目指すようになっていきます。そんな彼女は今、家族と離れて一人で生活しています。母と弟がドイツ語のできる彼女に必要以上に依存していたため、支援者たちは、彼女に一時的に家族から離れて暮らす

ことを提案し、家族には福祉的な支援を提供しました。そして、職業学校に通いながら資格習得に集中できる環境を整えるということが彼女への支援の方向性となっていたのです。しかし、実際には彼女がその支援のあり方を受け入れるのに2年の月日が必要だったと言います。支援者たちは、それを寄り添いながらずっと待ち続けていたそうです。来年、彼女は看護師の資格を手に入れ、小児科の看護師としてどこかの病院で働き始めます。そして一定の経済的自立を果たした上で、再び家族と一緒に生活を再開するということでした。

このような支援のあり方を見る時、そこに当事者である彼女の人生の物語が、一つ一つ積み上げられていく様子が伝わってきます。彼女の周りの支援者たちは、彼女の葛藤をどこまでも尊重したと言います。そして、その葛藤を彼女自身が主体的に乗り越えた時、彼女のキャリアが一つ前へと進んでいくように感じました。

ドイツ語では、職業のことをベルーフ *beruf* と呼んでいます。しかしこれは、「職業」というよりも「天職」に近い職業観だそうで、神から与えられた使命であると考えられています。それは決して間に合わせ的に見つけるようなものではなく、自分自身との深い対話の中で見出されるものなのかもしれません。(このあたりのことについては、マックス・ウェーバーの『職業としての学問』が詳しい)

2つの移行期が重なり合うところで若者たちのキャリア形成が営まれていく時、そ

れは必然的に不確定さを含むこととなります。それ故、彼らのキャリア形成は、あるパターン化された形成過程をたどるのではなく、個々の若者たちが自己更新を遂げ、変容を続けながら徐々に構築されていくような複線的なイメージを持っています。そして、彼らの変容が向かう先は、単純に既存の消費社会の中へと組み込まれていくということではなく、その消費社会を越えたところ、あるいはその消費社会の中に点在する形で成立している、どこか生産的で文化的なこだわりをもった世界であるようにも思うのです。

